

いま、ヤマが動く

戦後の人工林利用適齢期 都市巡り緑の循環



解体材再利用 つなぐ70年



伐採された丸太を保管する貯木場。合板の原料になる一岐県中津川市の森の合板工場

戦後に植林した人工林が利用適齢期を迎えた。再生可能な地球資源として国産材を積極活用する一方、木造住宅などで都市に蓄積した木質材も回収し、木材の有効活用に取り組み合板の企業グループが注目される。また、自然志向派を中心に林業に飛び込む若者も目立つ。国産材の活用、若い力が地域を支え、持続可能な循環型の森林づくりを進める。都市にヤマをめぐる動きを追った。

【山本浩】

丸太を運ぶフォークリフトが行き交い、トラックの荷台から、外部から持ち込まれた柱、壁材など家屋の解体材が音を立てて滑り落ちる。庭木の枝葉も青々としたまま、東日本大震災による港



床材や壁材のほか、テーブルの表面材に活用し、木目の美しさを表現するなど、合板の可能性は大きい一岐県中津川市の森の合板工場

敷地には、解体材を処理しチップにする施設やパーティクルボード、P Bなどの工場が並ぶ。P Bは、チップにした木片を繊維状にした板状の建材、合板類などの家具材

に使われる。セイホクが、木を3段階で使う「木材の300%活用」という木質資源の循環システムを構築したのは2001年。丸太から製造した合板を使つた住宅の解体後、解体材をチップ化して木を製造し、家具などに再利用。廃棄される家具を回収し、3段階目の活用としてボイラー発電の燃料に使う。工場での電力や合板乾燥の熱源として再利用。解体材など再利用される量は年間6万トに及ぶ。

「合板」地域を支え

長野県に近い一岐県中津川市加子母地区。東遷し、その産地として知られた林業地帯。全国初の山間立地の合板工場が2011年に稼働した。原料は100%国産材で、その名も「森の合板工場」。セーホクと岐阜県森林組合連合会が設立した「森の合板協同組合」が運営する。原木は、岐阜県と長野県、愛知県などから集材。岐阜県の原木生産量の3分の1にあたる年間10万立方メートルの原木を使い、年間10億円超、周辺の山村に還元される。

従業員は新規に44人、うち38人を市内など近郊から採用した。今年4月、岩手県内陸部の北上市でも新たに「結の合板工場」が操業を始めた。東日本大震災で壊滅的被害を受けた同県大船渡市のグループ工場を引き継ぎ、セーホクやホクコ、ライオンなどが出資した北上プライウッドが、岩手県森林組合連合会の協力を得て運営する。年間10万立方メートルの県産材を合板にする。両工場を統括する「森の合板協同組合」は、唯一再生産できる資源。木を植えてくれた先人にも感謝し、永遠に語り継がれる。

自然と共生 世界に発信

木材の循環活用などについて、日本合板工業組合連合会会長も務める、セイホクの井上篤博社長に聞いた。

井上篤博セイホク社長



セイホク株式会社
国内最大の合板メーカー。1954年井上博氏が東京で創業。現在、合板のほかパーティクルボードなど木質建材の製造販売を手掛ける。関連企業40社を持ち、グループ全体で社員数は約1800人、年間約1000億円。社長井上篤博氏は60年生まれ。中央大学法学部法学科を卒業後、米国に留学しMBA（経営学修士）を取得。

「木材の300%活用」の一部である人間が、自然の循環について。大学を卒業後、アメリカの大学院へ留学。50年分の木材生産が可能なヤマを持つというコンセプトの林業企業を訪問した時です。計画的な伐採と同時植林すること50年後には、最初の1年目の伐採場所に樹齢50年の木が育っている。自然の

も可能になり、国産材合板の時代が本格的に到来したのです。国産材を活用することで、その地域の経済にも貢献できます。2000年に14万立方メートルだった合板業界の国産材活用は、昨年は330万立方メートル、約330億円が森林のある地域に還元されたことになり、地方創生につながります。

林業に女性の視点を



秋田県で林業に関心を持つ女性が昨年9月に設けた秋田県林業女性研究会。林業機械の操作や勉強会を開く。秋田プライウッドから2人が入会している。

「森林や環境保全に興味があった」と入会の動機を話すのは、小野ひとみさん（総務経理部）。「女性が活躍することで、林業のイメージアップにつながる」と意欲的だ。

佐藤信子さん（森林事業部）は「林業に女性の視点が入ること新たな発想が生まれる」と強調。環境保全や災害防止など森林の機能を挙げ「都市に住む人が林業を身近に感じられることをしたい」と夢を語る。

都市の若者取り込む

林業に目を向ける若者や、木の活用方法を考える都市とヤマをつなぐイベントなどに取り組む女性たちが目立ってきた。

奈良県大淀町の前田駿介さん（25）は、20歳で林業会社に入社。県南部の吉野林業地で伐採などのほか作業道づくりも手がける。

「地球温暖化や環境保全問題もあって、林業が、社会から必要とされている」と語る。「100円の商品がもてはやされても次々に捨てる時代。僕は、森や道がずっと残っているように手を入れて、次の世代にバトンタッチする大事な役目を持っている」と強調し「カネはこつへん（給料は高くないけどやりがいがある）」とほかに。

一方、全国各地で林業女子会が広がっている。林業に縁のない都市部の女性たちが、山仕事を手伝い、森林関連の若者向けイベント開催などの活動を展開している。

2010年に京都で生まれた林業女子会は、いま18団体。秋田県林業女性研究会のように、林業女子会同士が交流するネットワークに入っている団体も多い。東京都内や近郊で活動する「林業女子会東京」の糸川結花さんは「目的は、森林や木のファンを増やすことと説明。環境保全の意識の高まりを背景に、自らの活動を模索する若者の案内役を担っている」。

森の力を、日本の力に。

緑豊かな地球環境を守りながら、資源循環型社会の実現を目指します。

「木材の300%活用」で、資源循環型社会を次世代へ。

かけがえのない地球の自然を守りながら、住環境の充実化を促進し、資源循環型社会を未来の世代に引き継いでいく。それが、セイホクグループのミッションです。その実現のため、三段階の木材利用として、①木をすぐに燃やすのではなく、合板等の木材製品にして長く利用する＝「木材の100%活用」、②合板等の利用が終わったら回収し、リサイクル木材製品の原料として活用する＝「木材の200%活用」、そして、③再利用できなくなったら最後に燃料として活用し、電気や熱などを供給する＝「木材の300%活用」を活動の基本とし、多彩な製品やサービスの提供に努めています。限りある地球の資源を、地域の、そして日本の力に。私たちセイホクグループの未来への約束です。

【事業概要】

合板事業・LVL事業・PB事業・IB&HB事業・フローリング事業・森林事業・環境リサイクル事業・物流事業・住宅プレカット事業

西北プライウッド株式会社（宮城県石巻市）
秋田プライウッド株式会社（秋田県秋田市・男鹿市）
北上プライウッド株式会社（岩手県北上市）
ホクヨープライウッド株式会社（岩手県宮古市・茨城県古河市）
新秋木工業株式会社（秋田県秋田市・能代市）
森の合板協同組合（岐阜県中津川市）
松江エヌエル工業株式会社（島根県松江市）
新栄合板工業株式会社（熊本県水俣市）
宮古ボード工業株式会社（岩手県宮古市）
株式会社カリヤ（岩手県宮古市） 他30社

セイホク株式会社

〒113-0033 東京都文京区本郷1丁目25番5号
TEL.03-3816-1037 FAX.03-3814-1625
<http://www.seihoku.gr.jp/>